

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 21 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520162

研究課題名（和文）

越境性を軸とした映画史再構築に関する基礎的研究

研究課題名（英文）

Foundational Research Related to a Cross-Border Reconstruction of Film History

研究代表者

M. F. Meli (MELI MARK)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00340646

研究成果の概要（和文）：

本研究は、従来の映画史研究がナショナルな枠組みにとらえられすぎていたことへの反省から、異なる文化圏にまたがる映画作家の活動、特定の映画作品内における異文化表象、映画作品の伝播に伴う文化的摩擦、国境を越えた民族的ネットワーク圏における映画製作の状況といった、映画史における諸々の越境的な事例に注目し、越境性を軸とした映画史の再構築を目指したものである。

研究成果の概要（英文）：

Rooted in the reflection that previous research in motion picture history has been too concerned with the framework of the nation, this research attempts to focus on various kinds of cross-border examples in the history of cinema, in order to attempt a reconstructed view of film history from a cross-border standpoint. Research themes included: the work of film makers who straddle more than one cultural area, the cross-cultural representations within cinematic works, the cultural friction that arises with the transmission of cinema, and the situations which come about when films are made in ethnic areas which are not defined by the nation-state.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：映画史、越境、中国語圏映画、ヨーロッパ映画

1. 研究開始当初の背景

従来の映画史研究では、国民国家の枠組みを敷衍した一国史観にもとづく視点からの研究が主流を成してきた。映画史の古典的な大著であるジョルジュ・サドゥールの『世界映画史』、ジークフリート・クラカウアーによ

る『カリガリからヒトラーまで』、ロバート・スクラーによる『アメリカ映画の文化史』などは、一国史観に依拠した映画史の代表的な著作として広く読まれている。アジアにおいても、佐藤忠男による『日本映画史』、程季華（中国）の『中国電影発展史』、杜雲之（台

湾)の『中華電影史』等、数多の映画史が記述され、各国語に翻訳されてきた。これらの映画史はいずれもが特定の国民国家(地域)に立脚し、映画制作・配給・興行の各方面を通時的にカバーするという共通項を有しているが、それらは「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)により“共有されるべき”ナショナルな歴史として記述され、畢竟するところ同質的で均質的な国民的空間を形成するという点において「国家のイデオロギー装置」(ルイ・アルチュセール)として機能してきた。つまり、一国史観にもとづく映画史とは、数多の国民文化論・国民性論と同様、生来的にナショナリズムを根底に帯びざるを得ないのである。

ところで、各国(地域)の映画史的出来事や映画的影響は、実際には国境を越えた流動的・動態の様相を呈している。事実、上記映画史研究のいずれもが国境や境界を越えた映画産業・映画美学上の影響を認めている。しかし、一国史観的映画史では、そのような越境的事例はあくまで従属的・周縁的扱いにとどまっていると言わざるを得ない。このような映画史的限界は、次のような諸問題を扱うとき、ただちに困難に直面する。

- ・ 帝国植民地における映画的文化交渉・関係史上の出来事(日本映画史における中国・朝鮮・台湾映画史の欠落あるいは無視、各国植民地における映画政策の史的研究の層の薄さ、等)
- ・ 移民作家たちの位相(20世紀初頭の欧米留学経験を持つアジア各国の留学たちの映画的活動、ナチス・ドイツ政権下における、あるいは第二次世界大戦下におけるヨーロッパの映画人たちのアメリカへの流出とその前後の映画史的連続性と断裂性、等)
- ・ 国境を越えた民族的ネットワーク圏を射程とした現象(東アジア～東南アジアを中心とする華人社会と本国間の映画的文化的連続性、等)

このような事例を想定するだけでも、特定の地域や特定の作家による越境的行為とその影響を実証的に探求し、本来越境性をともなう映画文化の伝播の諸相を明らかにすることが、映画史研究における喫緊の課題であることは多言を要さない。

本研究の研究代表者および研究分担者は、以上のような共通認識のもと、すでに関西大学東西学術研究所に2009年度より「比較映像文化班」を発足させていた。周知のごとく、近年東アジアの政治史・経済史・思想史において、従来の一国史観を超えた隣接諸地域の

文化交渉学的研究手法が多く新たな研究成果を産出しているが、文芸領域に限定すれば従来の国民国家をベースとした一国史観が根強く残っている。当該研究班は「映画文化の越境と伝播」というテーマの下、ヨーロッパ、アメリカ、アジアにおける越境的映画研究の諸相を解明することを目的として研究活動を始動させた。本研究は、当該研究班における基礎的研究をベースとしたうえで、各地域における越境的映画行為のさらなる広がりにより緻密な実証性を目指し、映像文化における越境研究の基盤となるフレームワークを導き出すことを目指すものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来の一国史観に強く依拠した映画史研究から脱却すべく、東アジアと欧米の双方のエリアにおける越境的活動の事例のいくつか——従来のナショナル・シネマ史では周縁的存在にとどまっていたような事例——に焦点を当て、それによって映画史研究における新たな地平を切り開くことである。

研究代表者および研究分担者の申請時における研究目的は、以下のとおりである。

マーク・メリ：現代の英米ドキュメンタリー作品における日本イメージの生成

英米諸国の映像作品における東洋イメージの出現は映画産業初期に遡ることができるが、東洋イメージの“ゆがみ”はしばしば国際問題を引き起こすまでに至った。見る者と見られる者の不均衡なパワーバランスがはらむ問題は現代まで連続している。本研究ではとりわけ現代英米のドキュメンタリー映像作品を研究対象とし、このようなイメージの形成の過程とその影響について考察する。

堀潤之：第二次世界大戦後の欧州映画における中国イメージの形成

1960年代以降のヨーロッパの文化史・映画史において、「中国」がどのような対象として思い描かれ、表象されてきたのかを考察する。とりわけ、ジャン＝リュック・ゴダールの『中国女』(1967)、『東風』(1968)、マルコ・ベロッキオの『中国は近い』(1968)、ミケランジェロ・アントニオーニ『中国』(1972)、ヨリス・イヴェンスとマルスリース・ロリダンの長大な『愚公山を動かす』(1976)、『風の物語』(1988)などを主要な研究対象とするが、より知られていない作品の発掘と分析にも力を入れる。

韓燕麗：東アジア～東南アジアを越境する華人社会を基盤とした映画史的連続性

東南アジアのマレー半島に居住する中国系移民は、中国語（広東語と北京語の両方）映画を制作していた。現地ロケで、現地に暮らす中国系移民の生活を描いたこれらの映画から、戦後とくに冷戦期におけるイデオロギーの拮抗、移民たちのナショナル・アイデンティティの変容、東南アジア新興国家におけるエスニック問題などについて考察する。

菅原慶乃：民国期上海における越境的映画現象からの中国映画史の再構築

中国産映画史の初期段階において、欧米諸国への留学や、「英語を話す中国人」と称され、在華外国企業と密接な繋がりを保持していた買弁等のいわゆる中間層の役割は多大であった。しかしながら彼らの活動の詳細は現在に至るまで明らかにされず、中国映画史においても断片的な記録のみが残存している状況である。本研究ではこのような中間層の人的移動および人的ネットワーク構築の過程を実証的に解明する。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、一方では、映画史研究の基礎的な手法である一次資料にもとづく実証研究を軸とする。本研究は映画史の枠組みの再考であるため、諸処の映画史研究そのものも分析対象とする。既存の資料の再読・再考を通じて従来の映画史が見落としてきた点を洗い出し、同時に可能な限り各国・各地域において新史料の発掘も視野に入れる。また、扱う時代や分野によっては、映画研究者・映画作家等に対するインタビュー調査等も取り入れる。

他方で、本研究は文献調査のみならず、特定の映画作家の越境的活動を、実際に制作された映像作品の分析を軸としながら探究する方法も採用する。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果は、(1) 東アジア映画史にかかわるもの、(2) 欧米の映画や映像作品にかかわるもの、(3) 両者を包含するものに大別できる。以下、それぞれについて、今後の展望も含めつつ記述する。

(1) 東アジア映画史にかかわる成果としては、とりわけ、①1910年代と20年代にアメリカ東海岸に留学した中国人が、帰国後に映画産業にどのように関わったかについての資料調査、②1920年代および1950年代末のマレー半島における中国語映画の製作の実態調査が挙げられる。いずれも従来のナショナルな映画史では真剣に省みられることのなかったテーマの基礎的研究を目指したもので

ある。また、2011年に開催した研究会「東アジア映画史研究へのあらたな視座——三澤真美恵氏著『「帝国」と「祖国」のはざま：植民地期台湾映画人の交渉と越境』をめぐって——」で、より幅広いパースペクティブから、東アジア映画史の再検討を行った。

(2) 欧米の映画や映像作品にかかわる成果としては、以下の3点が挙げられる。①環境や自然観といった観点から日本を取り上げた映像作品を幅広く渉猟し、それらを目録として整理しつつ、比較文化論やエコクリティシズムの視点からの分析を行った。②映画作家自身の物理的な越境の事例として、とりわけフランスの映像作家クリス・マルケルの東アジアへの旅に焦点を当て、関連資料の収集を行った。③他方、映画作品それ自体の越境的な受容の一事例として、日本におけるジャン＝リュック・ゴダール作品の興行史・批評史を振り返りながら、地政学的な差異にも起因する日本特有のゴダールの「美学的」受容のありようを批判的に考察した。

(3) 本研究のまとめとして、2013年2月9日にシンポジウム「越境の映画史」（関西大学東西学術研究所主催）を企画・構成し、4名の外部研究者の協力によって、映画史における越境という現象の多彩な事例を考察した。このシンポジウムの第1部では、東アジア初期映画史の重要人物ベンジャミン・ブロッキーが20世紀初頭に上海、北京、香港、東京などを撮影してまわった軌跡をはるか百年後に国立台湾芸術大学の廖金鳳教授がたどりのおす過程を記録した謝嘉鋹『ブロッキーを探して』（台湾、2009年）を上映し、映画史における越境という現象を考えるにあたっての幕開けとしたほか、第2部で取り上げられる作品の抜粋を視聴した。第2部では、ロイド喜劇『危険大歓迎』の上海封切り時における文化摩擦（菅原慶乃）、トルストイ『復活』の中国語圏映画における伝播・翻案（西村正男氏）、マックス・ランデーの日本受容の特性（大傍正規氏）、ナチス政権下のルイス・trenカーの越境的活動（竹峰義和氏）をめぐり4つの研究発表とそれに続く共同討議を通じて、東西の映画史における多様な「越境」のありようを浮き彫りにした。このシンポジウムの成果は、マーク・メリ、韓燕麗、堀潤之による寄稿論文を加えて、論文集『越境の映画史』として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① 韓燕麗、1920年代のマレー半島における中国系移民の映画製作について、関西大学東西学術研究所紀要、第46巻、査読無、2013、pp. 71-82.
- ② 韓燕麗、戦争記憶の重構と再現：試論两部「少数民族」抗日電影、エクス言語文化論集、第8巻、査読無、2013、pp. 73-85.
- ③ Mark Meli, Japan-Related Films in the Archives of The George Eastman House International Museum of Photography and Film, Kansai University Journal of Cross-Cultural Studies, No. 1, 査読無、2013 pp. 1-19.
- ④ 韓燕麗、国家電影史的建構と解構——論新馬両国建国期間的華語電影制作、当代電影、第19巻、査読無、2012、pp. 65-69.
- ⑤ 堀潤之、映画は音楽のように一日本におけるジャン＝リュック・ゴダール作品の受容についてのささやかな覚書、東西学術研究所紀要、第45巻、査読無、2012、pp. 163-177.
- ⑥ 韓燕麗、『香港攻略船』：日記拠時期唯一部在香港撮製的劇情片、香港電影資料館『訊』、第58巻、査読無、2011、pp. 19-24.
- ⑦ 堀潤之、イメージ、写真、社会主義—『ゴダール・ソシアリズム』をめぐって、関西大学文学論集、第60巻2号、査読無、2011、pp. 47-62.
- ⑧ Mark Meli, High-Vision Satoyama: Japanese Agrarian Landscape for Home and Abroad, 関西大学東西学術研究所紀要、第44巻、査読無、2011、pp. 319-340.
- ⑨ 韓燕麗、戦後馬來半島の華語片制作——試析两部『馬來亜化華語電影、エクス言語文化論集、第7巻、査読無、2011、pp. 95-106.

〔学会発表〕(計5件)

- ① 韓燕麗、以少数民族為主人公的中国抗日題材電影、國際學術研討会：日・中・韓電影对第二次世界大戰的表述、2012年2月25日、香港理工大学.
- ② 堀潤之、カタストロフへのまなざし—収容所の表象をめぐって、関西大学東西学術研究所、2012年1月28日、関西大学.
- ③ 韓燕麗、ナショナル・シネマの構築と脱構築——マレーシアの華語映画について、中国文芸研究会2011年度合宿、2011年8月30日、福井県坂井市 民宿ちひろ.
- ④ 韓燕麗、Third Cinemaは可能か—「マレー化中国語映画」に関する考察、日本映像学会第37回全国大会、2011年5月29日、北海道大学.
- ⑤ 韓燕麗、戦後マレー半島における中国語映画の製作、海外華人研究学会第七回国際會議、2010年5月8日、シンガポール：南洋理工大学.

〔図書〕(計3件)

- ① 森時彦(編)、韓燕麗、京都大学人文科学研究所、長江流域社会の歴史景観、2013、250.
- ② 石川禎弘 編、韓燕麗、社会科学文献出版社、二十世紀中国的社会与文化、2013、496.
- ③ 堀潤之、韓燕麗、マーク メリ、菅原慶乃、関西大学出版部、越境の映画史、2014(発行確定)、200.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

M. F. Meli (Mark MELI)
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：00340646

(2) 研究分担者

堀潤之 (HORI Junji)
 関西大学・文学部・准教授
 研究者番号：80388412

韓燕麗 (Han Yanli)
 関西学院大学・経済学部・准教授
 研究者番号：10537096

菅原慶乃 (SUGAWARA Yoshino)
 関西大学・文学部・准教授
 研究者番号：30411490